

『ラヂオの時間』

1997年／日本／三谷幸喜監督作品

街弁って ストーリー過多じゃないでしょうか

会員 武藤 行輝 (67期)



「ラヂオの時間」
スタンダード・エディション
DVD 発売中
¥2,800 + 税
発売元: フジテレビ 東宝
販売元: 東宝
©1997 フジテレビ 東宝

LIBRA編集会議の坂仁根委員からの依頼を勢いで引き受けてしまったものの、着手しないまま締切日を迎えた。そういえば彼との会話の中で、カッコつけて自分が映画に詳しい風な話し方をしてしまったことがあった。依頼の電話を受けたときは、カッコつけるのは良くないなど改めて思った。

実際には平均して月に1本観るかどうか程度の私に映画評など書けるわけがない。しかし何か書かなくてはならない。

映画…思えばここ1年くらいめっきり映画を観ていなかった。映画だけではなくドラマにも小説にも、さっぱり手が伸びなくなっていた。理由はなんとなくわかっていて。弁護士になって6年目、自分はすっかり、「ストーリー」に疲れてしまっていた。

街弁はひたすら人のストーリーに向き合う仕事ではないだろうか。私の場合、依頼人側のストーリーに一生懸命想像力を掻き立てて追体験しようとしなければ、書面が進まない。そしてそれは、9割以上が悲しい・苦しい・辛い物語だ。感情移入するとともに限らないが、少なくとも映画やドラマを観ると同じ体力を使う。皆さんは、そんなことないですか？

仕事だけではなく、自分自身もそうだった。今はもう落ち着いているが、昨年の半ばごろまでの1年間は激動の日々であった。いろいろあって、2回も引越しをした。依頼人のストーリーだけでなく、自分に起こっている出来事に精一杯で、フィクションの物語に浸る余裕は全くなかった。

でも何か1本選んで書かなくてはならない。そう決心して一番最初に思いついたのが、大学生のときに初めて観てから大好きな『ラヂオの時間』だ。私は『古畑

任三郎』にハマってから三谷幸喜作品が好きで、名前が同じ「こうき」なのもあって愛着もあり、フォローし続けている。映画だと他には大ヒットした『THE 有頂天ホテル』、ドラマなら『総理と呼ばないで』が大好きだが、ベスト・オブ・ベストは映画監督第1作目の本作品だ。

本原稿を書くために先日改めて観た。すっかりストーリー過多で映画を拒絶していた私だったが、もともと大好きな映画だから、安心して入りこむことができた。

やっぱり文句なしに面白い。話も演技もセリフもエンディングテーマも全部、最高だ。

そして、自分でも驚くほどたくさん泣いてしまった。何度も観た映画だが、泣いた記憶はあまりなかった。年齢を重ねると同じ言葉からの感じ方も変わるものなのだな。それに、自分が昔から愛着をもってきたものが、現在も自分の琴線に触れるというのは嬉しいことだということもわかった。

仕事も生活も、ストーリーにまみれている。そんなときは新しい映画を観るのではなく、「心に残る映画」を観返してみると良いのかもしれない。それは見知らぬ土地を旅行するのではなく、故郷に帰るような、あるいは思い出の場所を訪れるようなことなのだと思う。ストーリー過多で飽和しているときは、この手があったのか。

と、こんなことを自省するきっかけになりまして、一時は後悔しましたが今は依頼してくれた坂委員にとっても感謝しています。

なお、私は映画の予告編すらネタバレだと思ってしまうほどネタバレに厳しいため、本稿でも映画の内容に全く触れていないことはご容赦ください。